





7/7は七夕の日。

一年に一度、織姫と彦星が会うことのできる日ですね。

ロマンチックでなによりです。

そういえばみなさん、この七夕の由来をご存知ですか？

もともとは、神様に対して織った着物を捧げ、豊作祈願などを行う秋の行事でした。

そのときに使われた機織り機が「棚機（たなばた）」と言われるもので、やがて仏教の伝来によりお盆を迎える準備の日としてこの行事の時期が7/7の夜に変わったことで、「七日の夕刻」→「七夕」という当て字になったと言われています。

織姫と彦星の話は中国から来ており、旧暦の7/7に天の川を挟んで最もよく輝いているように見える織女（しゅくじょ）星（琴座のベガ）、牽牛星（鷲座のアルタイル）を見て「一年に一度めぐりあいの日」と考え、現在のような伝説が生まれたそうです。

ではなぜ願い事をするのでしょうか？

これもまた中国から来ており、その昔、裁縫の仕事をつかさどると言われていた織女星に裁縫などが上達するようにと祈る乞巧奠（きこうでん）という行事がありました。

それがやがて、裁縫だけでなく芸事や書道の上達などを願うようにもなったそうです。

ということでみなさんも、お金が欲しいや彼氏が欲しいなど、欲にかまけた願い事は避けるようにしましょう。

今回の「七夕企画」では、七夕にちなんだ恋愛小説を載せていきます。

いつの世も、男と女の関係というのは絡み合った糸のように複雑で奇怪なもの。

織姫と彦星のように、己のやるべきことを放り投げてまで二人の世界に浸ってしまうほどの毒も含んでいます。

遠くて近い、近くて遠い。

そんな哀愁が描かれた作品をどうぞ読んでいってください。

青い星の忘れもの【汐咲里乃】

今日は七夕。朝から生憎の雨で、地上では夜空に天の川を望むことは叶わない。七夕の言い伝えによると雨が降ると天の川は水かさが増し、織姫は彦星と会うことができなくなると言われている。これはそんな地上から遙か頭上、天界でのお話。

「七夕に雨とか、ありえないわぁ」

赤を基調とした豪華な椅子の背もたれにぐったりと身を預けて泣き言を言っている彼女は、今日この日を心待ちにしていた織姫その人だ。私が来た時には、既に目を赤くして泣きはらした様子で、机には空になった酒の徳利が並んでいた。私が来るまでに随分飲んでいたのである。

「仕方のないことですわ。この時期、雨も多いですし」

落ちこむ彼女を窘めながらも、私、かぐや姫はこの状況をどう打破するかに頭を悩ませていた。織姫は天界を総べる天帝の一人娘で、彼女と私とは同じ天界で暮らす女性同士である。織姫は明るく、気さくで愛らしい姫君だ。いささか子供っぽい言動が目立つものの、基本的には一途で真面目な方である。しかし、酔いの回った彼女の様子は普段以上に幼く、そんな彼女の相手をするのはなかなか骨が折れそうだ。七夕のこの日のために用意されたのであろう、織姫の美しい虹彩の羽衣も力なく萎れているように見える。

「今年こそは、彼に会えると思っていたのに」

顔を俯かせ、しょんぼりと力なく呟く。彼女がこんなにも落ち込んでいるのはやはり、去年の七夕も雨天により彦星と会うことが叶わなかったからだろう。

「夫婦なのに一年に一度しか会っちゃダメだなんて……」

織姫と夫である彦星が引き離されたのは、結婚後二人が働かなくなってしまったことに天帝がお怒りになったからだと聞いている。しかし、私にはそんな愚かな織姫を自業自得だ、と責めることは出来なかった。

「……あなたも、私のように全てを忘れてしまえたら楽でしょうに」

つらい思い出なんて、無いほうが良いに決まっているのだ。私もかつて罪を犯し、その罰として地上に送られた。その時の地上での記憶は天界に戻る時に失くしたままだ。しかし、罪を償った自分には下賤な地上の記憶などもう必要などない。彼女だって、もう十分償っているのだから、いつまでも彦星だけを思い続けなくたっていいはずだ。全てを忘れて、誰か他の人と新しい恋をするほうが彼女にとってどんなにいいだろうか。

「あの人を、忘れる……」

降りしきる雨はまだ止む様子はない。晴天の時は眩いほどの光を放つ星たちも今のくすんだ空には一つも見えなかった。私の言葉を反芻するように呟いた後、織姫は俯かせたままの頭をゆっくりと横に振った。

「それは……無理。というより、絶対に嫌」

「何故です？ 忘れた方が楽なこともあるでしょう」

あまりにもハッキリと拒絶した織姫に対する言いようのない苛立ちに、私も自然と語調が強

まる。私のその声に、織姫が涙の跡の残る顔をゆるりと上げ、眉を下げて微笑んでみせた。

「確かに、今はつらいけれど……彼と出会って、私、すごく楽しいことがたくさんあったの」

彦星と初めて出会った日のこと、彼とした会話、彼との待ち合わせ。その話はどれも取り立てて変わったところのない普通の恋人同士の話である。しかし、一つ一つを慈しむように語る織姫を見て、それをただの惚気話と受け流すことは出来なかった。

「本当はね、私ずっと嫌だったの。毎日働いてばかりの生活。そりゃあ、周りは働き者だって褒めてくれるけど、それだけ。誰も本当の私のことなんてわかってない。彼だけが本当の私を愛してくれたの。だから私は彼を忘れたくなんてない。少くくらい会えなくても、私、へっちゃらなんだから」

彼女のゆるぎない思いが、強い瞳が、私には眩しかった。幼い言動が多く子供っぽいとすら思っていた彼女にこんな一面があったのかと呆ける私に織姫は笑顔のまま首を傾げて聞く。

「あなたには、自分のことを理解してくれるような、大切な人はいないの？」

いつもの明るい口調に戻って笑う織姫の問いに答えようと口を開く。しかし、その問いは私に答えられるはずがなかった。

「……わからないのです。」

大切な人のことなど何一つ、覚えていなかった。

「大切な方はいたのかもしれませんが、でも、何一つ、覚えていないのです」

私の記憶の全ては遥か彼方、地上においてきてしまった。今では何の罪で地上に行くことになったのかすら思い出せなかった。

「それが私に与えられた `罰、ですもの」

織姫の視線から逃れるように自然と視線が下がる。愚かなのは彼女ではなく、私のほうではないか。私には彼女のように誇れる思い出など一つもないのだから。

「地上のこと、本当に一つも覚えていないの？」

「……いえ、地上を離れる時、何故か悲しかったのは少しだけ覚えています」

地上に、何か大切なものを置いてきてしまった気がする。そっと瞳を閉じて、思いを馳せた。そうしたところで何一つ思い出せないが。

「そう……。でも、やっぱり忘れてしまうのは、悲しいことね」

失うことは悲しいこと。楽だと今まで思ってきたのは、そう思い込んだほうが苦しまずにすむからかもしれない。しかし、彼女の言葉にすぐには返せなかった。いまさら取り戻せない過去を悲しみ、悔やんだところで、何になるというのだろう。

「そうですね……。悲しい、です。」

それでも悲しいと認めざるを得ないと思ったのは、彼女の影響だろうか。今はただ、素直に彼女がうらやましかった。

「あれ、今更雨が上がったみたい。来年は会えるかなあ」

窓の外を眺め、織姫が呟く。次に彼女が彦星に会えるのは一年後だ。もしかしたら来年だって会えないかもしれない。

「わあ！ 見て、虹！」

窓枠に身を乗り出し、目を輝かせてはしゃぐ彼女をぼんやりと眺めた。それでも織姫は彦星を思い続けるのだろう。過去の愛おしい思い出があるかぎり、たとえどんなに引き裂かれようとも。じれったくなかったのか、彼女は虹を一目見ようと雨上がりの空の下へ飛び出していく。

「かぐや姫も、早くおいでよ！」

織姫の声が遠くに聞こえる。窓の外、笑顔で私に手を振る彼女が見えた。さきほどまでのくすんだ空はもう無い。織姫の頭上、朝日を浴びた空に美しい七色の橋が架かっていた。彼女のように私にもいるのだろうか。私が忘れてもなお思ってくれるような、恋人や家族が。遥か彼方、眼下にきらめく、置き去りにしたあの青い星に。

深い眠りから覚めると、見慣れた天井が見える。棺のようなカプセルから起き上がり、背伸びをしながら肺に空気を送り込む。一年ぶりの自分で吸う酸素はおいしく感じられた。

カプセルの作用のおかげで、筋組織に影響はない。立ち上がって周囲を見渡すと、白い壁の研究室には誰もいなかった。部屋の明かりもなく、床には古びた資料が散乱し、パソコンなどの機械は停止をしている。

私は首を傾げる。おかしい、何よりも研究を大切にしてきた人たちが、ほったらかしにするなんて。

衝動に駆られて、この部屋を出るための扉を開けた。

そして、愕然とする。

「……何よ、これ」

そこは活気あふれる廊下ではなく、何もない砂の世界。振り返ると、研究室だけがぽつりと置き去りにされていた。

「ねえ、みんなどこにいるの？」

ここは日本のはずなのに、一体この光景は何なのだろうか。

考えているだけでは何もわからない。私は手がかりを探すために、研究室に残された資料を読む。そして、カプセルの情報を解析するうちに真実に辿りついた。

「……うそ」

呟いても答えてくれる人はいない。

私が目覚めたのは四百年後の世界。そして地球は私が眠ってからすぐに、隕石の衝突により滅亡していた。

悪い夢だと思いたかった。でも、研究者は現実主義者だ。結果が出ている以上、幻想を抱くことはできない。

ふと脳裏に恋人の顔が浮かぶ。その瞬間、床に落ちていた機材の破片を掴み、思いっきり喉に突き立てる。

しかし、寸前のところで動きが止まる。両腕が石みたいに硬直して動かない。ここで初めて気づく。自殺をできないよう、体にプログラムをされていたことに。

「お願い、彼のところに逝かせて……」

手から破片が零れ落ち、そのまま地面に倒れ込む。そして獣のような声を上げ、みっともなく叫び続けた。

「うわあああああああ————！！」

私は、肉体の冷凍保存実験が成功した代わりに、全てを失ってしまった。

薄暗い砂漠を歩き続けて三十年が経つ。すり切れた衣類に、砂まみれの髪をなびかせても、誰も気にしなかった。

私の知らない時間の中で、人類どころか生物さえも全滅してしまったらしい。その証拠にあれだけ築き上げていた高層ビルが、生い茂る木々が、大海原が、消えている。全て砂の結晶になって崩れてしまった。

今踏みしめているのは、変わり果てた地球そのもの。

私はその場に座りながら、手でさらさらと流れる砂の感触を楽しむ。そして身をゆだねるように寝転んだ。

「ねえ、コウタもこの中にいるの？」

問いかけながら、空に向けて腕を伸ばす。

太陽も月もない。天候が変わる必要がなくなった大空には、無限の闇が広がっていた。

「昼間にも星が輝いているのは本当だったのね」

漆黒の空間には、一等星が宝石のように輝き、無数の星がさらに引き立たせていた。人工物がないからこそ、光が澄んでいる。照明なんていらぬほど、この世界は明かりに満ちていた。同じ空でも都会で見たものとは大違い。

瞬きをする間に、星の位置が少しだけ変わっている。十秒なんて目を閉じていたら、全く違う景色になっていた。最近になって気づいたが、冷凍保存される前とは時間の流れ方が違うらしい。体内時計だけは妙に発達し、一日中ぼうっとしていれば、あっという間に一か月が経つ。

その理由は必要以上にカプセルの中にいたせいだと私は考えている。保存をするための薬のせいで、体に副作用が起きたのだろう。おかげで動く人形のようにってしまった。

もう、涙を流すことさえ忘れる。自分の手ではどうしようもできないので、自然に朽ち果てるのを待つだけだ。早く恋人の元へ逝きたい。ただそれだけを考えて。

しばらく空を眺めていると、群青色に変わり、ベガとアルタイルの間を分けるように光の筋ができる。

「……天の川」

私はゆっくり起き上がり、ポケットの中から一粒の黒い結晶を取り出す。これは『種』と呼ばれるもので、唯一四百年後の世界に持ち込んだもの。

この『種』は普通の植物とは違う、特別な遺伝子を持っている。それは発光作用と、どんな悪条件の中でも育つ力。これが開発されたのは、私がまだ人間として生きていた時代。隣に恋人のコウタがいたときだった。

ある七夕の日、いつもと違った話題が世間を騒がせていた。なんと『種』から成長した苗が、家の近くの公園に植えられるらしい。それを聞いた私たちは、その日のデートの帰りに寄ることにした。

初めて見る苗に、言葉が出なかった。茎の部分は青く若々しいのに、小さな葉は一枚一枚が白く輝き、柔らかな光に包まれていた。

そして、ここで約束をしたのだ。

『来年も再来年もこの先も、毎年ここに来よう。この苗と一緒に俺らも成長していくんだ』

『うん、そうだね』

『まずは一年後、またここで会おうな』

コウタは、研究でしばらく会えなくなる私にこう言ってくれた。

私はこの実験の報酬として、どんな栄光のある富より、一粒の『種』を求めた。目覚めたときに、二人で植えるために。

でも、それは叶うことはなかった。コウタがいない世界で『種』を植えても意味がない。今は過ぎた思い出を忘れないためのお守りとなっていた。

私は『種』を両手で包む込み、胸元に寄せる。

「早く迎えに来てよ、ばか」

気が付くと、目まぐるしく星の位置が変わっていた。あれからさらに時間が経過したようだ。薄く開いた視界の中でも、色とりどりの光の粒がわかる。相変わらず星は輝いていた。人の気も知らないで、とても綺麗に。

「あ、流れ星」

ちょうど流星群が流れ始め、夜空に白い弧を描く。しばらく目で追いかけていると、遠くの方に光の柱が見えた。まさか流れ星でも落ちたのか。気になった私は、その場から駆け出す。砂に足を取られながらも、少しずつ前に進む。すると、丘が現れた。息を荒くさせながら、頂まで登りつめる。

「――これって」

目の前に現れたのは光に包まれた立派な木だった。木の根元に向かうと、葉が私の全身を照らしてくれる。何の根拠もないけど、私の中の思いは揺るぐことはない。

間違いなくこの木は、あの苗が成長した姿だ。

「……ん」

少し離れた所で、すり切れた布の塊が動く。奇妙な動きに、眉をひそめた。恐る恐るうかがうと、くしゃっとさせた髪に、顔を砂だらけにした誰かがいた。まさか、そんなはずはない。

「あ、アキハがいる」

目を細めて微笑む青年に、息を飲む。彼は私の様子なんか気にせず、一人でぶつぶつと呟いていた。

「そんなわけないか。どうせ夢落ちだ。あれ、でもこの体で夢は見ないよな？」

腕を組んで考え続ける彼に、堪えられなくなった私は飛びついた。

いくら体が人形のようにも、変わらないものがある。伝わる鼓動に、彼の匂い。答えるように背中に回る手の力加減は、心地よかった。

コウタがそこにいる。

「……アキハ、夢じゃないんだよな？」

「そうだよ、夢じゃないのよ」

抱きしめる力を強くし、お互いの存在を確かめる。久しぶりに呼ばれた名前に、じんわりと胸

が熱くなった。

「すごいや」

コウタが耳元でささやく。笑みを浮かべ、空を仰いだ。

「織姫と彦星は一年後に会えたのに、俺たちは五百年もかかった」

「それでも……また、巡り会えたじゃない」

赤く腫らした目で微笑み合う。

夜空には、銀河が鮮やかな一本道を描いていた。

たとえ、何度引き裂かれたとしても、私たちは必ず出会える。

『種』の光が導いてくれるから。

伝えられなかった言葉というのは、その人の中にずっと残って、いつまでも、思い出を愛し続ける。

僕は、何度も何度も、君に伝えられないまま、新しい朝を迎える。それは、
君のいない朝。君のいない夏。
君のいない世界。君のいない僕。

目を閉じれば、昨日のことのよう思い出すのに。

「俺も、行くよ」

「え？」

「俺も。陽奈子と同じ、東京の大学に行く」

「なんで。そこまですることないじゃん」

「告白のギャグができなくなるのは寂しい。それだけ」

「ばか」

「.....陽奈子の横にいたい」

「.....いいの？ 東京だよ」

「いいよ。東京だろ」

思い出の1ページ。

その冬的一幕はやさしくて。そして、

いつまでも消えることはないんだ。

七夕の説話はおよそロマンチックなものとして語られるが、僕はどうにも合点がいかない。年に一度の七夕にだけ、カササギの架ける橋によって再会が叶うふたりは、確かに儚いし、ふたりが互いを想ってこの日に流す催涙雨は美しい。けれど、

もともとふたりが離ればなれになった原因は、ふたりの怠慢にあるのだ。夫婦団欒にかまけて、織姫は機を織らず、彦星は牛を追わない。そんな散々たる状態に怒った天帝が、ふたりを別々にしたのが、七夕の始まりだ。

自業自得じゃないか。

それでも世間一般にとっては、差し障りのないことなのかもしれない。むしろ、離ればなれになって自らの怠慢を悔いている彼らを、切ないと思うだろうか。

手に握りしめている短冊に目をやる。さきほど駅前でもらったものだ。世間はまるっきり七夕ムードで、それが僕を苦しめる。

だいたい、短冊に書けるような願いなど、僕にはない。叶わないからこそ夢なのだと言うが、叶わないなら夢を見る必要などあるのだろうか。

僕は、叶わない夢なんて見たくない。

何にせよ、僕が織姫と彦星に対して抱いているこの苛立ちは、特別なものなのだろう。それはきっと、人に言わせれば嫉妬かもしれない。僕には織姫と彦星が、自分たちに重なって見えてしまうのだから。

僕と陽奈子に。僕の怠慢で、離ればなれになってしまった、ふたりに。

季節は3年前の春。地元の高校に入学した僕は、同じく1年生として入学してきた、薄野陽奈子に恋をした。彼女は、背が小さくて、小柄で、ちょこんとした雰囲気の子で、そのくせ勝ち気な性格だった。

「ちょっと男子、ちゃんと掃除して！」などという漫画のような台詞も、彼女が言うと不思議と、しっくりくるところがあった。きっと小柄のおかげで、たくましく箒を杖のように立てているのが、逆に可愛らしく見えるからだ。言われて男子は、ぐちぐち文句を言いながらも彼女に従うのだった。

そんな彼女に、僕は恋をした。

前途は多難。何度も彼女にデートの誘いして、その都度こっぴどく断られた。「あたしそういうの興味無いから」とさらりと受け流されては、負けじとまた、数日後にデートの誘いをする、というのが日常だった。

繰り返すうちに、僕たちはお互いに、そんなやり取りをするのが楽しくなってきた、気付けば学校内に、ふたりで居ることが多くなった。デートにはもはや、面白がって意地でも行きたがらなかったが。そうやって季節は過ぎゆき、

「あたしさ、東京の大学に行くんだ」

彼女がふと打ち明けたのは、僕らが出会って半年経った、秋と冬の真ん中のことだった。よく覚えている。学校からの家路で、落ち葉を踏み歩きながら、彼女は話を続けた。

「お父さん、東京で仕事しててさ。あたしずっと、お母さんと、おばあちゃんと、3人でこっち住んでたの。あっ、あと犬のケン太も」

前を見ながら、淡々と話す彼女。

「でも、去年、お母さん死んじゃったのね。ほんと、悲しみの日本海ってやつ。それでさ、あたし、去年じゅう、ずっと悲しくて泣いてて。だけど、あるとき思ったんだ。お父さんは、きっと、あたしよりずっと悲しんでるだろうなあって」

僕はしずかに、彼女の話すのを聞いていた。となりで、彼女のキラキラした目を、じっと見つめながら。

「そしたら、いつまでも泣いてられないぞ、あたしがお父さんの傍に居てあげなきゃだめだ、って思うようになったのね。それで、だから、」

そこで陽奈子は言葉を詰まらせた。そして、しばらく躊躇ったのち、言った。

「だから、ごめん」

言葉が、僕の深い部分へ落ちていく。

それは深く深く、心の奥底まで。

響くように、沁みるように。

僕の中に溶けていった。

だから結局、僕は織姫と彦星が、羨ましいのだと思う。

織姫と彦星は、1年に一度、カササギの架けた橋の上で会えるが、僕と陽奈子は、もう二度と会うことはないのだから。

大学に合格して、東京へ行く陽奈子。

大学に落ちて、地元に残る僕。

ふたりは完全に、道を違えたのだ。

東京へ行く陽奈子を、笑顔で送り出すためには、僕は陽奈子と連絡をする一切の手段を断つしかなかった。そうしなければ、陽奈子を送り出すことなど出来ないし、送り出したところで、いつまでも陽奈子を諦められないだろうと思った。

でも結局は、このざまだ。

すべての連絡手段を断ったところで、僕は陽奈子を忘れられない。^{いたち} 鼯の道切りをしたところで、心までは切れなかった。かといって、繋がっているのかもわからない。

陽奈子はどうしているだろう。

いまごろ、知らない誰かと手を繋いでいるだろうか。

それとも、まだ僕を想って空を見上げてくれているだろうか。

今日は七夕だけど、僕はいつもと変わらず、君と約束をした湖に来ているよ。あの日と違って、体中を刺すように暑い、こんな日でも、まばゆいほど鮮明に思い出せるんだ。湖畔を歩く君の歩幅は狭くて、僕は気をつけて歩きながら、そんな格好で寒くないのって訊いたね。そしたら君は、誰のためにこんな格好してると思ってんのよ、って僕の二の腕を叩いて、笑ったんだ。その笑顔を見て、僕は決心した。そしてこう言ったんだ。

「俺も、行くよ」

3年経っても、覚えている。君のこと。ふたりのこと。

僕は、握りしめた短冊に殴り書く。

なんて自分勝手なんだろう。

離ればなれになるなら、もう連絡をしない方がいいと決めたのは僕なのに。

お互いのことは忘れて、新しい恋をした方がいいに決まっているのに。

なんでだろう。

なんでだろうね。

なんで、君のことばかり考えてしまう僕がいるんだ。

なんで、君に会いたいと思ってしまう僕がいるんだ。

君に、想いを伝えたいと思ってしまう僕がいるんだ。

君に伝えたい。僕はまだ、君に大切なことを伝えていない。大切な、とても大切なことを。

君にあいたい

瞬間、水面が跳ねた。僕は空を見上げる――鳥だ。

黒い小さな鳥が、飛びながら水面を掠めたのだ。その鳥は空中で大きく旋回して、大きく鳴いた。

すると、鈍い音をたてながら、湖の底から光が洩れだした。その光は、柱になって天へ伸びていく。いや、違う。これは柱じゃない。これは、

橋だ。

光の橋が、湖から、ずっと先の方まで伸びている。

呆然と湖畔に立ち尽くしていると、空から鳥が下りてきて、僕の肩にとまった。そしてひと声、ぴいと鳴いた。「さあ、行こう」と言っているように聞こえた。

僕はそこから、思い切って橋へ飛び乗った。橋は柔らかくて、硬くて、そしてなにより、あたたかかった。一步ずつ、橋の伸びる方へ歩き出す。僕の体はぐんぐん前へ進んだ。まるで誰かが、背中を押してくれているようだった。

橋の真ん中が見えてきて、そこに誰かが立っていることに気付いた。それが誰か、なんとなくわかる。

その誰かのすぐ目の前で、僕は立ち止まった。

目と目が合う。よく知っている目だ。キラキラしていて、でもその奥には悲しそうな青色をひめている、とても綺麗な目。

涙がでるのを必死にこらえる。泣くのはまだ早い。

僕は一步、踏み出した。そして、言った。

「好きだ」

確かに、言った。

目の前の女性が目を細めて、ひとすじ涙を流す。

橋が、ふたりを包むように、まばゆい光を放った。彼女が光の中へ消えていく……。

陽奈子。陽奈子。彼女の名前を呼ぼうとしても、うまく口が動かない。その手をつかまえないのに、うまく体が動かない。

好きだ。何度でも、何度でも伝えたい。

頭のとっぺんから、足の先まで。

心も体も。

その声も。

白い吐息も。

大好きだ。大好きなんだ。

――だから、行かないでくれ――

こらえきれなくなつて、僕の左目から涙がこぼれた。右目がそれに続いて、気が付くと僕は、わあわあ声を上げてひとり泣いていた。

鳥が僕の肩から飛び立って、目が覚めるほどけたたましい声で鳴いた。

私は川底で目を覚ました。柔らかい苔のベッドから水面を見上げると、無数の光が水の中で砕けて揺れている。

起き上がり水をひとかきすると、小さくない身体はすぐに外へ出た。その場所は、小さな星空。私は天の川の中から顔を出していた。

それは川の両端から伸び、ドームのように空を覆う木々の隙間からすり抜けた月明かりが、暗い川の水面に落とす光の粒だった。私は川辺に突き出した岩に腰掛け、大きな青い尾だけを水につける。

私はこの川が一番美しい天の川になる満月の日に、岩の上で揺らめく星を眺めたり、尾びれの先でそれをすくったりするのが好きだった。もうずっと昔に亡くなった母がそうしていたからかもしれない。

彼女と会った日も、私はそうして流れていく星々を引き止めるように尾の先で弾いていた。すると後ろから葉の擦れる音がして、振り返るとそこには一人の少女が立っていた。黒い三つ編みの彼女は革靴を履き、二本の足で立っていた。

あの、と驚いた表情の少女が小さく声を上げる。

私は内心、焦った。思えば誰かと話すのなんて久しぶりで、喉がくっついたように離れない。しかし私の不明瞭な声が漏れるよりも早く、彼女は口を開いた。

「もしかして、神様？」

彼女の見当外れな言葉は思ったよりも私の緊張を和らげたようで、その意味を理解すると、私は思わず笑いを零していた。長いこと誰かと言葉を交わしていなかったがためにおぼつかない会話も、川と私の尾を交互に見てすごい、きれいを繰り返す彼女の前には無意味だった。

「星空の観察に来たの。わたし。でもせっかく色々持ってきたのに道に迷っちゃって」

彼女は首から提げたカメラを水面に向かって構え、シャッターを切る。一瞬川が大きくきらめいて、しかしそれはすぐに砕けて消えていった。彼女はカメラを確認すると、悔しそうな声でうなる。

最初に来てからというもの、彼女はひと月に一回、明るい満月の日にこの場所を訪れるようになった。初めて会った日に持っていた大きなリュックサックは次の月には彼女の背から消え、首から提がるカメラひとつだけになっていた。

真剣な様子でカメラと眼前の光景を見比べているのをいいことに、私は彼女の横顔をじっと盗み見た。自分で結んでいるのか、どこか頼りなさげな黒い三つ編み。学校帰りなのか、紺のスカ

ートから伸びる白い足と、それから柔らかそうな赤い唇。特にこの唇がだめだった。見ているとどうしても引き寄せられて、触ってみたいような気持ちになるのだ。

そうしていると、彼女が不意に顔を上げた。黒い瞳が私を捉え、不思議そうに丸くなる。

「あれ、今見てた？」

「見てないよ」

その言葉に、思わず反射的に否定してしまう。すると彼女はいたずらっぽく笑い、見てたでしょ？ ともう一度言う。見てないよ、私がまた言うと、彼女はおもしろがって私の両頬を手で挟み、嘘だあと笑った。唇がきゅっと弧を描く。私は思わずそれに手を伸ばした。

「あっ」

力を入れすぎた。そう思ったのは、彼女の身体が傾いたからだった。河原の浅いところに私たちを倒れ込む。

影が重なったのは、ほんの一瞬だった。

倒れたせいか片方ほどけた彼女の黒い髪と、人魚である私のうす青い銀の髪が水の上に広がる。そして空から落ちてきた光が、彼女の肌に当たって一瞬魚の鱗を思わせた。その姿に切なさがこみ上げてきて、私は彼女の頬に手を添えると半ば縋るように抱きしめる。

「ど、どうしたの」

「ごめんなさい」

さっきまで笑っていた彼女は、急に泣き出した私に戸惑っていたが、やがてそろりと私の背中に手を回し、優しく叩く。

「ごめんなさい、寂しくて」

いつの間にか涙が溢れていた。堪えていたものが決壊して、止まらなくなっていた。

この美しいこの川の、私は最後の住人だった。もうずっと前、私と同じ人魚だった母が亡くなったとき、私はこの場所にひとりぼっちになった。けれど母と過ごしたこの場所を、宝物のようにきらめく天の川を私は捨てることができずにいたのだ。

一人でも大丈夫だと思っていた。けれど心のどこかでは、人のものではない鱗の尾びれと、私に温かく笑いかけてくれる誰かを探していたのだ。

嗚咽を漏らし続ける私の背中をあやすように叩いていた手が止まり、そしてゆっくりと抱きしめられる。思わず顔を上げると、よほど酷い顔をしていたのか、彼女がわずかに笑う。

「寂しいのはヤダよね。私もキライ」

「うん」

私が言うと、彼女は背中に回していた手を私の後頭部へ持って行って、そっと力を込めた。再び影がひとつになる。今度はもう少し長く。

昔まだ水の中でうまく呼吸ができなかったとき、母がこうして息を吹き込んでくれたことが、あったかもしれない。あのときの母の唇の感触を思い出すことはできないけれど、きっとこの唇は、母のものより柔らかく、そして熱いんじゃないかな、と思った。触れた場所から苦しさが薄れて行って、離れた後もそれを感じていたくてたまらなかった。

その欲が顔に出ていたのか、彼女が小さく笑う。

「もう一回する？」

私は返事もしないまま、もう一度呼吸を求めた。

彼女はあの後も、満月の日になるとここへやってくる。天の川の写真を撮ることには飽きてしまったのか、最近はずぶらだ。けれどその代わりに泳ぎに興味を持ったらしく、服のまま水に飛び込むと、私に手を引かれながら川の中を行ったり来たりしている。そして時々呼吸が苦しくなったと言っては私の頬に手を添えるのだ。私は仕方がないなあという顔をしながらも、自分から彼女に顔を寄せる。

そうしていると、彼女は泳ぎながら、織姫と彦星みたいと笑った。一年じゃなくて一ヶ月じゃない、とか空の天の川じゃなくて本当の川だよ、とか言いたいことはたくさんあったけど、それよりも先に、恋人に例えられたことがどうしようもなく嬉しくて、胸の奥が緊張して熱くなった。

私は今日も川辺の岩に座って彼女を待つ。

遠くから聞こえてくる小さな足音に、私は胸を高鳴らせる。

そして彼女がいつものように明るく私を呼んだら、驚いたように振り返って、そして安心したように笑ってみせるんだ。

ビー玉くらいの大きさの金平糖を口の中へ入れる。最初は所在無さにゴロゴロと舌の上で転がしてみる。温かな唾液で少しずつ角が溶けていったその砂糖菓子は、やがてほろっと消えてしまう。残るのはただただ甘いだけの空気で、それを流そうと水を飲む。口の中の甘さを絡めとった水が喉をチクチクと通り抜けてストンと胃に収まると、最初から何も無かったかのように口の中はさっぱりしてしまうのだから、可愛らしいのにずるいお菓子だと思う。いつからか私の中で金平糖は、ずるさの象徴だ。

半透明の水色の金平糖を一つ取り出して、夜空に向けてかかげてみる。薄雲が空を覆っていて、星は雲の隙間から時折顔を出す程度だ。上空では風が強いのか、雲は形を変えつつ忙しく流れて行く。風にならって流れて行くだけで進むべき道を進んで行けるのだから、雲は羨ましい。そのうちどこかで雨となって地上に落ちるか、静かにすうっと水の分子に戻ってしまえば良いだなんて、そんな楽なことってないと思う。

サワワッと空気を揺らしながら緩く風が通り抜けて行って、髪から放たれるシャンプーの匂いを鼻へと届ける。人工的に作られた、何のようなど形容し難い「良い香り」は少しだけ私を苛つかせる。かかげていた金平糖を口の中へ放り込み、一気に歯を立てた。ガリボリと小気味良い音を立てて砕ける金平糖に、心の中でざまあみろと呟き、甘い小さな欠片たちを嚥下する。

○

「それ持ってこっちにおいで」

黒い画用紙を持ったあなたは私に手招きをする。ひんやりとした畳の上、裸足のあなたと私は、画用紙を挟んで向かい合う。

「この上にそれを出してごらん。ちょっとじゃ寂しいから全部だよ」

うん、と頷いて言われた通りに画用紙の上にざらざらと全ての金平糖を出す。こんもりと小さく盛られたその山をあなたが両手で均していく。

「あ、水色とピンクは一つずつ残して袋に戻そう」

「どうして？」

「あとで聞かせてあげるよ」

「ふうん」

理由を教えてくれないあなたにちょっと不満気に鼻を鳴らすと、困ったように頭を掻きながら「今日何の日か知ってる？」と聞いてきた。

「分かんないもん」

唇を尖らせながら答えてピンクを一つ袋に戻す。

「短冊にお願いごと書かなかったの？」

「……書いたよ」

「じゃあ分かるじゃん」

あなたが水色を一つ口の中へ入れる。直後、カリッという音が小さく聞こえた。私も真似してピンクを一つ口の中へ入れる。

「……うん。七夕でしょ」

「そう、せいかーい」

水色もピンクも白より全然数が少なくて、あっという間に戻し終わった。

「ほら、見て。何かに見えない？」

あなたが画用紙の上の金平糖を指しながら、得意げな顔をして言う。黒い画用紙の上にはお星さまのような形をした無数の白い砂糖菓子が広がっていた。その中に水色とピンクのお星さまが一つずつ紛れ込んでいて、ちょっぴり恥ずかしそうに顔を見合わせているようだった。その光景は大好きな絵本の最後のページとよく似ていて、それに気付いた瞬間私の心臓がトクンッと一度大きく鳴った。

○

携帯を取り出して時間を確認すると午前一時を過ぎていた。暗さに慣れていた目が明るい画面を見続けるのを嫌がる。周りを見ても人はいなくて、ブランコに揺られながら再び空へと目を向けた。膝の上に置いてある金平糖とペットボトルが、落とされてはたまらないというように腿へとしがみつく。ブランコはキーキーと哀しそうに何かを訴えかけてきた。夜の公園では全ての遊具が寂しそうな表情をしていて、みんなが私の仲間のように思えた。

○

「お前本当に金平糖好きだよな。イマドキの子ってもっと、クレープ食べたーいとか、パフェ食べたーいとか言うもんじゃないの？」

歩道橋の上、私よりも半歩後ろを歩くあなたが言う。今朝まで降っていた雨はすっかり上がって、一四時の太陽が水たまりにキラキラと反射している。

「んー？ クレープもパフェも好きだよ。でもほら、それって特別な美味しさじゃん。これはもっとささやかな……他の女の子が飴玉持ってるのと同じよ」

「飴の替わりねえ」

「うん。それにさ、形も可愛いじゃん。お星さまみたいで」

そう言って私は太陽に向かって半透明の金平糖をかかげる。小指の爪くらいしかない小さなそれは、太陽を背にして輝いているように見える。

「それまだ言う？ おまえもう高校生だからね？」

「最初に言ったのはそっちでしょ。あれ何歳の時だっけ」

かかげていた金平糖をあなたに手渡して、にやりと笑う。

「何歳だっけ。俺が四年生とかじゃない？ というかその話はもういいの」

恥ずかしそうにそっぽを向くあなたが愛おしくて、最後の言葉は聞こえないふりをした。

「わあ、もう十年も前なのか」

「いつも俺の後くっついて来てたよね」

目は優しく太った三日月を描いているのに、口角を意地悪そうに引っぱり上げてこっちを見るあなた。私の真似をして金平糖をかかげてから、それをポイツと口の中へ入れる。金平糖でも飴でも氷でも、口に含むとすぐに噛み砕いてしまうのがあなたの昔からの癖。けれど私の耳が待っていたカリッという音は、珍しく聞こえてこなかった。

「そりゃあね、頼れるお兄さんって感じがして大好きだったし」

「あ、過去形なの」

「はいはい、いちいちそういうのを拾わないー」

くるりと振り返り、宥めるようにキスをする。昔から一度も追い付くことのなかった身長差を埋めるように背伸びをして。一瞬で離れるはずだった唇は、あなたが突き出してきた舌に阻まれる。角の取れた砂糖の塊が舌と一緒に口の中へ押し込まれた。反射的に舌を絡めようとしてしまった私の頭をコツンとあなたが小突き、体が離れる。

「はい、おうち帰るよー」

「え、なに、今の私が悪いわけ」

「ん？ なんのことかな」

ははは、なんて笑いながら先を行ってしまう背中に悔しさを覚えて口の中の金平糖を噛み砕いてしまおうとしたのに、歯を立てる前にほろっと崩れてしまった。それは私の好きな感覚だけど、やっぱり悔しさは収まらない。差し出された手にスクールバッグを押し付けて、あなたを追い越して歩道橋の階段を下った。

○

雲の流れは私の気分を道連れにして、だんだんと遅く重たくなってきた。口から吐き出される甘く暖かい空気は、周りの空気に溶け出してそこかしこで浮遊している。ピンクの金平糖をひとつ取り出してまじまじと眺めてから、なるべく遠くへ飛んで行くように放り投げた。滑り台の階段に当たったそれは、いくつか角が欠けて地面へと落ちていく。そんな光景が想像に容易かった。もしかしたら半分に割れてしまったかもしれない。脆くて可哀相で愛おしいその金平糖は、誰かに気付いてもらえるのだろうか。

○

「大好きだよ、本当に」

あなたの言葉は確かに過去形ではなかったのに、どうしてその姿は私の隣にはないのだろう。どうして私を置いてあっさりと遠くへ行く決断ができてしまったのだろう。小さな頃から私の隣はあなたで、あなたの隣は私で、それは一度も変わったことがないはずなのに。

あの日も、「ごめんね」と言って私の口の中へ金平糖を押し込めた。それはビー玉くらいの大

きさがあって、まだ十分には角が取れてなくて、絡めた互いの舌の上で暴れた。塊が全て溶けるまで私達は離れなかった。私は少し泣きそうだったけれど、ぐっと堪えて、代わりにあなたの舌を噛んだ。それでもあなたは私の頭を小突かずに、それどころか逆に引き寄せて私の耳を塞いだ。どうせだったらもう少し前、聞きたくない現実を聞く前にそうしてほしかったのに。外界の音を遮断された私に聞こえるのは、絡めた舌から放たれる水音。それと、心臓の裏側から幽かに響いてくる、筋肉と骨とを無理やり剥がされるかのような痛みを伴った、ミシミシという音だった。

大学二年。あなたに恋をした年から数えて一三回目の夏のこと。

○

具体的な将来の約束なんてしたことはなかった。「迎えに来るよ」とは言われなかったし「待ってるね」とも言わなかった。会っていないうちに私が少し大人びた笑い方をするようになったと知ったら、あなたはどのような反応をするのだろうか。あなたといた頃の私はどんな笑い方をしていたっけ。

ここへ現れた時は私を警戒していた遊具達が、今は寄り添って慰めてくれているように感じる。上空では風が止んだのか、雲はもう停滞していた。天の川なんて綺麗に見えないこの街では、強く輝く星のみが目に映る。デネブ、ベガ、アルタイルで形作られる夏の大三角くらいなら普段は判別することが出来るのに、滞っている雲のせいで今夜一番重要な星が見えない。

その星を補うように薄い水色の金平糖を一つ、そっと夜空にかかげた。

時というのは、残酷だ。

「ねえ、聞いた？ 透也さん、こっちに帰ってくるんだって」

誰に対しても等しく平等に、全てを連れて、流れ去っていくものだから。どれだけ強い感情を持ってしようと、その一瞬を、永遠のものにしたいとどれだけ狂おしく思おうと。その願いが、叶うことはない。

「知らないし聞いてない。だいたい、あの人の実家はこっちじゃねえだろ」

だからこそ時は優しいのだと、いつだか聞いたこともあるけれど、俺はそんなの認めない。強い日差しを避けた木陰の中、少し先を歩く幼なじみに視線を向ける。自分より頭一つ分は低い身長。背中まで流れる黒髪は、不思議と暑苦しい印象は与えず、むしろ涼しげに彼女の歩みに合わせて踊っている。すらりとした手足も、時折振り返っては俺を見るその顔立ちも。時の流れは確実に、まだあどけなかつた幼なじみを可憐に仕立て上げていた。

「じゃあ、引っ越してくるっていった方が正しいのかな」

彼女は足を止めないまま、何かを思い出すように空を見上げて言葉を紡ぐ。

「卒業したらこっちで一人暮らしするんだって。部屋探したいから、夏休みに入ったら来るって言ってたよ」

「.....へえ、良かったな。これでずっと会いに行きやすくなるじゃん」

答えた声は、我ながら不自然なほど硬く聞こえた。ずいぶん詳しく知ってるんだな、とか誰から聞いたんだよ、とか零れかけた言葉を、苦勞して飲み込む。幸か不幸か、彼女は何も気づいていないようだった。

「八月の頭にはこっちに来るんだって。お祭りも一緒に行けるかなあ」

嬉しそうな横顔に、胸が大きな音を立てて軋んだ気がして、目を伏せる。何年経っても変わらない、あの頃からずっと見てきた、幼なじみの表情。

だから、時は残酷なんだ。どんなに流れても差し込められた杭だけは、どうしたって押し流してはくれない。

「引っ越しの準備で来るんだろ、そんな暇ないんじゃないか」

「こっちにいる時間も長いみたいだし、毎日忙しいわけないもん。ちょうどいいよ」

奇妙な間を不思議がられないよう、軽く言葉を投げかける。続く会話は、何気ない風に流れていてくれているだろうか。

「何がちょうどいいんだか知らねえが、ま、頑張れ」

「あ、冷たい。由真も一緒に行くでしょ？」

さも当たり前のようにかけられた言葉に、隣に並ぼうとした足が止まる。琴乃、と彼女を呼ぶ声が、まるで他人のように耳に響いた。なに？ と振り向く少女に不意に怒りだしたいような、泣いて許しを乞いたいような衝動が突きあげる。

なあ、琴乃。俺は、一緒には行けないんだよ。

だって俺は、あの人に嘘をついているんだから。あの日から、ずっと。

「なんかアイス食いたくなってきた。奢るからコンビニ寄らねえ？」

けれど口をついて出たのは思ってるのとまるでかけ離れた言葉で。当然だ。言えるわけがない、こんなこと。いきなりだなあ、とぼやきつつ笑う彼女を見て、また罪悪感がこみあげる。

「私ハーゲンダッツがいいなあ。季節限定の美味しそうなもの出てるんだって」

「そんな金あるわけねーだろ」

他愛もない、けれどその分、和やかな会話。絶え間なく降り注ぐ蝉の音が、嘘つき、嘘つき、と責め立てているような気がした。

きっと最初から、主役はあの2人だったのだろうか、と思う。いや、もしかしたら、俺は舞台にすら立っていなかったのかもしれない。

篠川透也。七つ年上の、俺達の遊び友達。黒髪で背の高い、よくいえば優しそうな、悪く言えば気弱そうな顔立ちの少年だった。琴乃の近所に住むおばあさんの孫だとかで、夏休みの間だけ、一緒に遊ぶようになったのだ。最初は不本意だったが、彼女の家へ遊びに行けばほぼ必ず彼に会うのだから仕方がない。琴乃は彼にべったり懐いていたから、引き離して遊びにでかけるなんて考えられなかったのだ。俺からしたらどこかずれたような、どうにも油断ならない人に見えて、なかなか打ち解けることができなかったのだけれど。

「七夕は、元々は芸事の上達を願うお祭りなんですよ」

彼は、年下の俺達にも丁寧語で話すような人だった。雨で外に出られなくなった日、琴乃の部屋で遊びながら、ふと思いついたように語り出す。物知りな彼は民話や伝承にやたらと詳しくて、思いついたときに話して聞かせてくれたのだ。静かで落ち着いた口調で語られる内容は分かり易く面白くて、そのときばかりは俺も、つい聞き入ってしまった。

「芸事の上達、って？」

「字が上手くなりますように、とか。習い事が上手になりますように、とかですね」

噛み砕いた言葉で言い直し、透也さんはほほえましように傍らに座る琴乃に目を向ける。俺たちの前に広げられていたのは、星座の図鑑、だっただろうか。

「元々は中国の伝説と、日本にあった機織女の伝説が重なり合ったものだそうですよ。そこに星座の伝説がくっついて……七夕伝説は、琴乃ちゃんも知っているでしょう？」

うん、と琴乃が答える。図鑑に流れる天の川を指でなぞりながら、嬉しそうに、幸せそうに彼の顔を見上げて語るのは、有名すぎる男女の恋物語。耳を傾ける彼の横顔も、どことなく幸せそうだ。すっと、世界が遠のく音がした。……ああ、またか。

いつからだろう。彼らと遊んでいるときに、自分が透明になったかのような錯覚を覚えるようになったのは。雨の音がいやに耳に響き、彼等の声を遠ざける。

(織姫と彦星、か)

ふと、自分たちだけの世界に浸っていたという彼らと二人の姿が重なった気がした。ならばいつか、彼らにも、訪れるのだろうか。お別れ、というものが。

それを怖れているのか望んでいるのかは、自分でもよく、分からなかった。

「高遠君は、僕のことが嫌いですか？」

唐突な言葉に心臓が縮み上がったのは、決して凶星を突かれたからではないと思いたい。琴乃の家からの帰り道だった。まだ降り続ける雨の中、二人分の傘の花を広げて歩く。

「……そんなことはないですけど」

絞り出すように答えた言葉に、透也さんは良かったあ、と大げさなほど明るい声を上げた。

「つか、なんでそんなこと聞くんですか」

「理由、ですか？ なんとなくですかねえ」

なんだ、それ。からかわれたような気分になって腹立ち紛れに足を速める。余裕の顔で隣を歩かれるのが、無性にむかついた。雨はやまない。明日も、外では遊べないかもしれない。

「じゃあ、琴乃ちゃんの話は、好きですか？」

今度こそ本当に心臓が縮み上がる番だった。いきなり何言い出すんだこの人。答えるに答えられずへどもどしている俺を、彼が微笑ましげに眺めているのが分かる。顔に熱がこもっていく気がして、たまらず傘の陰にかくれた。

「べ、別に、ただの幼なじみだし！」

「そうですか」

散々迷った挙げ句に出てきた言葉は結局そんな陳腐なもので、それすらも微笑ましげに答える声と傘越しの視線に、お腹の底がむずむずとするような、走って逃げ出したいような気持ちに駆られる。

「……それなら、高遠君。ひとつ頼んでもいいですか」

本当にこのまま走って逃げてしまおうか、なんて考えていたら、頭上からまた声が降ってきた。静かで落ち着いた声色。いつもと同じはずの、けれど何故か妙に胸騒ぎがするような、そんな声。

「琴乃ちゃんの傍に、いてあげてくれますか。あの子が、なるべくなら泣かないように。泣いてしまったら、すぐにその涙を拭いてあげられるように。見ていてあげてください」

その言葉に、思わず傘をあげた。彼の真意を確かめたくて、青い布の下からその表情を確認する。まっすぐに自分を見おろしてくる年上の少年は、確かに、笑みを浮かべていた。

なんで、どうして、そんなことを自分に頼む。第一、あの子が、幼なじみのあの少女が泣くとしたら、彼女が拭ってほしい相手なんて、一人しかいないだろうに。

それが分からない、彼ではないだろうに。

「……あいつが泣いたら慰めるのなんて、前からやってた」

けれどそう詰め寄れなかったのは、詰め寄るだけの言葉を持たなかったからなのか、それともただの意地なのか。視線を逸らして答えにならない答えを返した俺に、透也さんは可笑しそうに笑みを零した。

「そうでしたね。なら、心配することもない」

ひとりごとじみた、意味深な言葉。どういう意味か聞き返す前に、ばしゃりと水たまりを踏む音が響いた。

「さて、つきました。それじゃあまた明日、高遠君」

気がついたら、自宅のすぐ前までやってきていた。彼は軽く傘を傾けてそう言い残し、返事を待たずに踵を返す。俺はその背を、ただ見送ることしかできなかった。この話をするためにわざわざ自宅近くまで一緒にやってきたのだと、そこで初めて気が付いた。

頼みごとの真意を知ったのは、その翌日のことだった。彼が朝のうちに家に帰ってしまったのだと聞いたのは、親の口からだったように思う。朝のうちに家族で車に乗って、慌ただしい出発だったらしい。

俺も、もちろん琴乃も、ひと言も別れを告げられなかった。

「来年は息子さんも受験だっておっしゃってたし、もう少しのんびりされればいいのにねえ」

同情するように付け足した母親の言葉で、なんとなく察することができた。そうか、つまりはこれが、彼らに訪れたお別れだったのか。

その日は琴乃に会いに行くことはできなかった。泣いているだろうことは分かっているけど、家の前までやってきて部屋を見上げているのが精いっぱいだったのだ。

その年を最後に、俺は、彼と顔を合わせていない。

「——おい、おい、危ないぞ！！」

強い力で鞆を引っ張られ、我に返った。浴衣姿の女性の二人連れが驚いた様子で身をすくめているのを見て、ぶつかりかけたことを悟る。慌てて謝罪をして、前に行く友人の後を追った。

「ぼけっとしてんなよ、由真。こけるぞ？」

「こけねーよ」

「女の子にぶつかりかけた癖に」

お前がぼんやりしてるなんて珍しいよな、と言いつつ自分を見上げる友人は、しゃべりながらひょいひょいと人混みを避けて歩いている。器用なものだ。琴乃のことも誘ったらしいのだが、申し訳なさそうに断られてしまったと話していた。

「琴乃ちゃんも来ればよかったのにな」

「用事だって言うなら仕方ないだろ」

透也とここに居るかもしれないということは、さすがに言う気にならない。

近所のお祭りは、そこそこ規模が大きいことで有名だ。その地域で一番広い道に屋台が立ち並び、昼間から賑わいを見せている。目玉は祭りの最後に行われる花火大会で、それ目当てで観光客がやってくるほどだった。

昼間は山車も出たらしいけど、人が増えてくるのはやはり夕方から夜にかけてだろう。けして

狭くはない道が息苦しく感じられるほどの人混みをすり抜けながら、友人と屋台を冷やかして歩く。綿菓子の甘い匂い、ソースの焦げる音、呼び込みの声、ヨーヨーすくいのゴムの匂い。あちこちには、くす玉や吹き流し、短冊をさげた笹が飾られている。旧暦で七夕を祝う祭りであることも、有名なことだ。

(七夕伝説、か)

たとえば、あの二人が本当にあの伝説の二人なら、確かに今日は七夕なのだろう。距離という天の川を乗り越えて、数年ぶりの逢瀬を楽しんでいるのだろうか。

胸が痛まないわけではない。あのときの苛立ちの意味も、あの錯覚の理由も、分からないと言いきれるほど子供ではないつもりだった。けれど、俺になにができる？

俺は自ら、舞台を降りたのだから。いやもともと、舞台に上がってすらいなかったのかもしれない。

それなのに。

くりかえし自分に言い聞かせてきたはずなのに。

どうして俺の目は、いとも簡単に彼女を見つけ出してしまうんだろう。

雑多に混ざりあった匂いと音の向こう、見つけた琴乃は、浴衣姿だった。背中まで伸びた黒髪は綺麗に結び上げられ、紺地に鮮やかな紫の朝顔柄がいつもより数段大人びて見せている。いや、きっとそう見える柄をわざわざ選んだんだろう。隣に立っているのが、きっと透也だ。年相応に精悍さは持ち合わせているが、初対面の頃とほとんど印象は変わっていない。すれ違う人達からちらちらと注がれる視線からかばうようにさりげなく立つ姿は、遠目から見ても紳士的だ。ああ、やっぱり。こうして見ても、きちんと似合いの二人に見えるじゃないか。

たぶんこのとき目を逸らすのが、正解だったんだろうと思う。見なかったことにして背を向けて、友達のあとを追いかけることが。実際、彼らが祭りの雑踏にまぎれたら、そうしていただろう。

けれど、彼らが人ごみの少ない方に向かったから。

「あ、おい由真!？」

「わりい、急用!」

気が付いたときには、俺は二人の背中を追いかけていた。

——何考えてんだよお前、花火大会までには戻れよ？

「……本当、何考えてんだろうな」

友人から届いたメールにひとりごち、画面の明かりを落とす。あとをつけるなんて趣味が悪い。出歯亀なんてもってのほかだ。気付かれない程度に距離をとった先にある背中を見つめ、ため息をつく。男女が人ごみの少ない方に行ってしまうなんて、ひとつしかないに決まっているのに。

。

脳裏に下世話な想像がちらついて、慌てて頭を振った。そんな場面が見たいわけではない。ならどうして、俺はあの二人を追いかけているんだ？

(.....戻ろうかな)

こんなこと、琴乃にばれたらそれこそ軽蔑される。迷っているうちに二人は角を曲がり、姿が見えなくなってしまった。確か、このさきには神社があったはずだ。

決めた、一目二人の姿を見つけたら、なにをしようとそのまま戻ろう。無理やりにでもそう決めて、神社の境内に足を踏み入れる。なるべく音をたてないように探しまわっていたら、本殿の裏手に人影を見つけた、の、だけれど。

「ちょ、琴乃ちゃん!？」

驚いたような、慌てた声が辺りに響いた。なにが起きているか分からない。けれど明らかに、穏やかな様子ではない。声がした方へ駆けていった俺の横を、誰かがすり抜けた。夜みたいな紺色の浴衣の裾が、視界の端ではためく。

「琴乃!!」

幸か不幸か、彼女は俺に気が付かなかったようだった。浴衣姿のくせに、呆れるほど速くその背中では遠ざかる。いや、そんなことよりも。俺の見間違いでなければ。

すれ違った彼女は確かに泣いていた。

「.....もしかして、高遠君ですか？」

とっさに遠ざかる背中を追いかけてしようとした足が、固まる。ほとんど条件反射で振り向いた先にいたのは、言うまでもなく透也さんで。

ああ、もう本当に、一体なにがどうなっているんだ。

「僕、先生になったんですよ」

挨拶もそこそこに何したんだ、と詰め寄った俺に、彼は変わらず丁寧だった。

「教員免許がとれて、高校の古典の先生に。来年度から、高遠君たちの高校に行くことになったんです」

穏やかに、当然の近況報告のように語られる内容は俺が聞いても十二分に衝撃的なものだった。琴乃がどう思ったかなんて、想像するまでもない。

「それで、こっちに引っ越してくんのか」

「高遠君も知ってたんですね」

また、よろしくお願ひしますと微笑みかける彼の表情は、あの頃と変わらずあまりに優しく、無邪気で、だからこそ残酷に映ただろう。

「.....アンタ、本気でそれ言ってんのか」

あいつがどれだけまた会うことを心待ちにしていたか、突然会えなくなって、どれだけふさぎこんできたか、知ってて言ってんのか。知らないふりをして、優しいお兄さんの顔をして、アンタはあいつを突き離れたのか？

気づいていないはずがないのに。アンタが、なんとも思っていないわけがないのに。

「……泣きそうなとき、琴乃ちゃんとそっくりの顔をするのは、変わらないんですね」

胸倉をつかまんばかりに詰め寄る俺に、彼はふと眉をさげて微笑んだ。昔を懐かしむような目の色、表情。二人は、本当に仲よしでしたから、付け足された言葉は答えにならない答えを俺に突きつける。

全部昔の話ですよ、と。

ふざけんな、と叩きつけたかった。それで突き放して、あいつの気持ちはどうなるんだ。あれだけ幸せそうな顔で、アンタのことを話していた、あの子の、気持ちは。昔の思い出で片付けるのに、清算させてあげることもしないのか。

「落ち着いてください、高遠君」

遠慮がちに触れてきた手が、胸倉を掴みかけていた手をおろさせる。その左手に鈍く光るものに、そのとき初めて気がついた。左手の薬指に、指輪。その意味くらい、さすがに知っている。琴乃は、気がついたのだろうか。気がついたから、なにも言えずに逃げ出すしかなかったのだろうか。

「それで、君は。なにをそんなに怒って、なにに引け目を感じているんです？」

知らず目を伏せていた俺の頭上に、声が降ってきた。昔と変わらない、静かで落ち着いた声色。懐かしいはずの、けれどどこか叱るような響きの、声。

「僕が玉砕させてあげなければ、高遠君はなにもできないんですか？」

あなたは一番大事なものを見失う子には見えなかったんですけどねえ。その言葉に、思わず顔をあげた。かちあった視線に含まれていたのは、少しの挑発と、そして確かな、失望の色。

一番、大事なもの。そんなのは、最初から、決まっている。分かっていた。けれど、きっとどこかで泣いているあいつが望んでいるのは、俺じゃない。それも、痛いほど分かっていた。

「……あんたが行くべきだ」

「それをあの子も望んでいるから、ですか？ どうして君にそれが分かるんです？」

絞り出すような声を強い言葉で切り返されて、言葉に詰まる。

「望みも、幸せも、その人自身が決めるもの。……ほかの誰かが決めようなんて、傲慢もいいところです」

重ねられた言葉が、胸に刺さった。

「まあそれで諦められる程度なら、僕が行きますけど」

ひとりにしては可哀相だ、とわざとらしく歩きだした腕を、反射で掴む。ここに来て、他の誰かに譲ってたまるか。とりわけ、目の前のこの人に。

「俺が行く。心当たりなら、あるから」

低く告げた言葉に、透也さんは満足そうに表情を緩ませた。そのまま、軽く背中を押される。

「早く見つけてあげてくださいね」

「言われるまでもねえ」

奇しくもあの雨の日と似たような会話をして、踵を返す。

早く、あの泣き虫な織姫を見つけよう。もう泣かないでいいように。来ることのない彦星を、もう見ないでいいように。

間違っているけど、もうかまわないとおもった。

彼女自身の口から聞くことだけが、きっと^{ホントウ}正解だ。そう、確信できるから。





by さあきゅう&いちまつ



<http://p.booklog.jp/book/87610>

著者 : kemmy

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/kmit-kemmy/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/87610>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/87610>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ